

第4章 各教科等における具体的な取組

1 国語科

(1) 国語科における思考力・判断力・表現力の育成と評価の実態

ア 言語活動の充実の考え方

国語科における言語活動の充実とは、基本的な国語の力を定着させ、言葉の美しさやリズムを体感させるとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行うことを通して、実生活に生きて働き、各教科等の学習の基本ともなるべき国語の能力を培うことと捉えている。そのためには、児童生徒が自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置付けて指導事項を指導することが必要である。そこで、単元を貫く言語活動を具体化するためには、次のような手順で計画を立てることが考えられる。

ステップ1 単元で指導する指導事項の確認

学習指導要領，年間指導計画による指導事項の確認及び単元目標の設定

ステップ2 身に付けさせたい言語能力の具体化と重点化

指導事項の分析による，言語能力の具体化と指導事項の絞り込み

ステップ3 児童生徒の実態の把握

関心・意欲・態度，身に付いている（いない）言語能力，言語活動の経験の把握

ステップ4 教材の分析と補助教材・資料・教具等の選定

学習の目標達成に適切な教材選定と教材文の特性の把握

ステップ5 効果的な言語活動の設定

身に付けさせたい言語能力に最適な単元を貫く言語活動の具体化

ステップ6 指導計画等の作成

単元の指導計画，1単位時間の学習計画の作成，発問，板書計画

イ 実態調査の結果と考察

平成23年度に実施した実態調査の結果から、次の点が明らかになった。

(ア) 評価に用いる情報や資料に関しては、児童生徒の思考の様子を評価するために、「ノートやワークシート」を活用する割合や、「調べたことなどを基に考えたことを書いた文章」を活用する割合が全校種で高い(図14)。このことは国語科における「思考・判断・表現」を評価し、その後の的確な指導に生かすためには、ノートやワークシートに書かれた児童生徒の言葉を活用する必要があるという意識が高いことを表している。

(イ) 評価の判断をどうしているかという問いに対しては、評価規準をB「おおむね満足できる状況」として判断しているケースが全体の3分の2を占めている(図15)。このことから、各学校において評価規準を設定し、評価を実施しようとしていることが分かる。しかし、児童生徒の表現したものから、何をどのように「思考・判断・表現」したかを効果的・効率的に評価し、指導に生かすために評価規準を十分活用できているかということについては、大きな課題となっている。

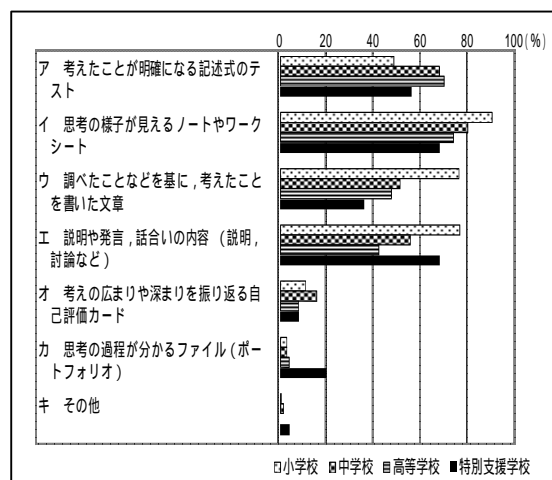


図14 国語科における評価の資料

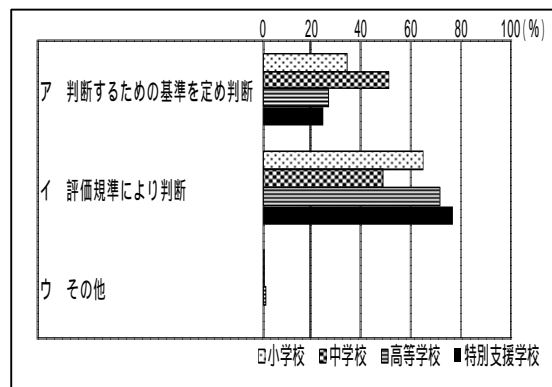


図15 国語科における評価の判断

(2) 国語科における「思考・判断・表現」の評価

ア 「思考・判断・表現」の観点

国語科においては、学習指導要領の内容の示し方やこれまでの実践を踏まえ、「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」を、基礎的・基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせて評価する観点として位置付ける。

	国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
小学校	国語で伝え合う力を進んで高めるとともに、国語に対する関心を深め、国語を尊重しようとする。	相手や目的、意図に応じ、話したり聞いたり話し合ったりし、自分の考えを明確にしている。	相手や目的、意図に応じ、文章を書き、自分の考えを明確にしている。	目的に応じ、内容を捉えながら本や文章を読み、自分の考えを明確にしている。	伝統的な言語文化に触れたり、言葉の特徴やきまり、文字の使い方などについて理解し使ったりするとともに、文字を正しく整えて書いている。
中学校	国語で伝え合う力を進んで高めるとともに、国語に対する認識を深め、国語を尊重しようとする。	目的や場面に応じ、適切に話したり聞いたり話し合ったりし、自分の考えを豊かにしている。	相手や目的、意図に応じ、筋道を立てて文章を書き、自分の考えを豊かにしている。	目的や意図に応じ、様々な文章を読んだり読書に親しんだりして、自分の考えを豊かにしている。	伝統的な言語文化に親しんだり、言葉の特徴やきまり、漢字などについて理解し使ったりするとともに、文字を正しく整えて速く書いている。
	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
高等学校	国語で伝え合う力を進んで高めるとともに、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図ろうとする。	目的や場面に応じて効果的に話し的確に聞き取ったり、話し合ったりして、自分の考えをまとめ、深めている。	相手や目的、意図に応じた適切な表現による文章を書き、自分の考えをまとめ、深めている。	文章を的確に読み取ったり、目的に応じて幅広く読んだりして、自分の考えを深め、発展させている。	伝統的な言語文化及び言葉の特徴やきまり、漢字などについて理解し、知識を身に付けている。

なお、評価規準については、当該単元で重点的に取り上げる指導事項に基づいて設定する。

イ 「判断基準」の設定の在り方

国語科の授業は、各領域の能力を確実に身に付けさせるために、言語活動を通して指導事項を指導するものである。その際、これらの関係を確実に踏まえた上で、指導に生かす評価が効果的・効率的に実施できるようにすることを考えて、「判断基準」を設定した。

具体的には、次の順序で「判断基準」を設定し、指導と評価を実施していくことになる。

単元の評価規準の作成

単元の目標に基づき、育成すべき言語能力を明確にして評価の観点を焦点化する。

単元の指導計画の作成

各観点の評価をバランスよく実施することのできる指導計画を作成する。

言語能力の育成に最適な言語活動を、単元を貫いて位置付ける。

課題解決に向けて最も思考力・判断力・表現力を発揮すべき時間を特定する。

評価の時期の焦点化

「判断基準」の設定

評価規準を分析し具体化した、「判断の要素」「判断基準」を設定する。

判断基準Bを満たす表現例を、児童生徒の実態に応じて想定する。

指導と評価

判断基準Bによる指導と、判断基準Bに照らした評価を実施する。

補充・深化指導

「努力を要する」状況の児童生徒に対する補充指導を「判断基準」の項目や表現例を踏まえて実施する。

B状況にある児童生徒への深化指導を「十分満足できる」状況を示す判断基準Aに基づき実施する。

実際に評価する際には、観点や時期を焦点化して設定した評価規準を基にしてワークシートやノートの記述に表れた児童生徒の表現を見取る必要がある。そのため、その表現が学習のねらいを達成しているかどうかを具体的に児童生徒の言葉で想定しておくことで、効果的・効率的に評価し、指導に生かすことができる。

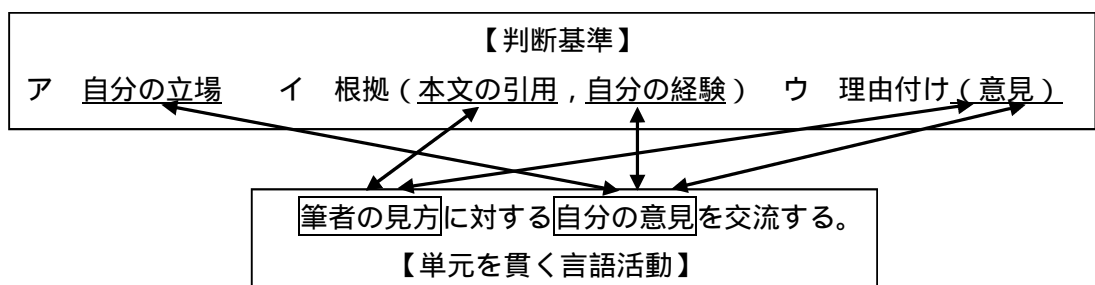
【「判断基準」の設定例(中学校 第2学年 読むこと「日本人はアリスと同類だった」)】

評価規準【読む能力】		単元を貫く言語活動との関連が見えるように留意して具体化する。
読む能力 筆者の見方や考え方に対する自分の意見が、経験等と関連付けて根拠を示しながら明確に表現されている。		
評価時期及び評価の対象		何をを用いて、いつ評価するのかを明確にする。
5時間構成の第4時 ワークシートの記述		
判断の要素		評価規準を満たしているかどうかを判断する際のポイントを箇条書きする。
ア 自分の立場 イ 立場を裏付ける根拠 ウ 立場と根拠をつなぐ理由付け		
尺度	判断基準	判断の要素の各項目について、「おおむね満足できる」状況として具体化する。
B	筆者の見方に対する自分の立場を明確にしており、それを裏付ける根拠と、根拠を基に立場に説得力をもたせる理由付けが述べられている。 ア 自分の立場を一言で述べている。 イ 立場を裏付ける根拠を示している。(本文の引用, 自分の経験) ウ その立場に立つ理由付けが、自分の意見として述べられている。 【予想される生徒の表現例】 ア 私は、筆者の意見に賛成です。 イ 日本人が昔から、「語り絵」と呼ばれるもの等に触れ、絵を読んで楽しんでいたように、 ウ マンガやアニメは、絵を見ただけで場面の様子や人物の気持ちが理解できるからです。 イ 私自身、マンガやアニメによって励まされたり、心が癒やされたりすることもありました。	
C 状況の生徒への指導	補充指導 アについて...作者の見方や考え方を再度振り返らせる。 イについて...筆者の主張の記述から引用させたり、経験を振り返らせたりする。 ウについて...マンガやアニメとどのように関わってきたかを、筆者の主張を踏まえて考えさせる。	判断基準を達成した具体的な状況を生徒の言葉で想定する。
A	根拠を、教材文以外の引用など、他の方法も用いて示している。 理由付けとなる意見の説得力を、反証や仮定などにより高めている。	判断基準Bを達成できなかった生徒に対しての、補充指導を具体化する。
B 状況の生徒への指導	深化指導 多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を取り入れさせ、自分の考えをより説得力のあるものへと高めさせる。 (学級文庫の活用、ヒントカードの提示など)	判断基準Bを基に、より質の高い思考・判断・表現であると判断できる(「十分満足できる」と評価できる)具体的な状況を設定する。

(3) 「判断基準」に基づく指導と評価

ア 「判断基準」に基づく指導の考え方

単元を貫く言語活動は、当該単元で扱う言語能力の育成に最適なものでなければならない。そのため、設定に当たっては、言語活動自体のもつ特徴が単元の指導目標達成にどうつながるかを確認する必要がある。そこで、下のように「判断基準」と単元を貫く言語活動とを照らし合わせるにより、その言語活動を通して身に付けさせたい能力を確かに育成することができるかどうか、その妥当性を確認することができる。



イ 「思考・判断・表現」の見取りと補充・深化指導

単元を貫く言語活動を通して児童生徒が何をどのように「思考・判断・表現」したかを見る際に、「判断基準」を用いると、効果的・効率的に見ることができる。下の文は、「筆者の見方に対する自分の意見を交流する」ために生徒が書いた意見文である。意見文の構想段階で、「判断基準」の内容を取り入れたワークシートを用いることで、意見文の評価をより確実なものにすることができる。この場合、「判断基準」である三点について全て記述し、内容もおおむね満足できる状況であることから、B状況と見取ることができる。このような見取りに基づき、補充・深化指導を行う。

ア 自分の立場を一言で述べている。
 イ 立場を裏付ける根拠を示している。(本文の引用, 自分の経験)
 ウ その立場に立つ理由付けが、自分の意見として述べられている。

判断基準

自分の意見	自分の経験	本文の引用	理由	筆者の見方について
自分でマンガや本を読んだこと。	絵を読んで初めてかもしらる感じがわかります。(P.89, 87)	自分もアリスの「絵も会話もない本なんて何の役に立つのかしら。」と思うし、そんな本はあんなに思わなかった。		共感できる。

メモをもとに意見文を書いてみよう

私は筆者の「私たちが日本人は大人も子どもも昔からアリスの同類だったらしいのです。」という筆者の見方について考え、自分の意見を書こう。

ア
 イ
 ウ

「私たちが日本人は大人も子どもも昔からアリスの同類だったらしいのです。」という筆者の見方について考え、自分の意見を書こう。

深化指導の結果

【B状況の生徒に対する深化指導】
 学級文庫に、漫画やアニメに関する評論文等を準備しておき、引用させる。
 反証や仮定の文例をカードで示し、意見文に挿入させる。

(前略)また、イタリアのアニメーション作家、ブルーノ・ボツエットは、「あらゆる芸術の中で10秒か20秒で一人の人間の人生を語れる... (略)」と言っています。
 「～については だという意見もありますが、私は反対です。なぜなら、～。」

このように判断基準Bを設定することによって、生徒の実態に応じてその質の高まりを想定することができ、児童生徒の学習意欲を更に高めることができると考える。

補充指導については、判断基準Bのどの項目を満たしていないのか、また満たしてはいるが、「おおむね満足できる状況」にない項目はどれかを確認し、それに応じた助言等の指導を行うことによって、B状況と判断できる表現へと高めることができる。

【補充指導】(判断基準Bのイを満たしていない場合)
 なぜなら私もアリスの「絵も会話もない本なんて、何の役に立つのかしら。」と思うし、そんな本...
 助言 「アリスの言葉よりも筆者の主張をまとめている部分から引用しよう。」
 なぜなら「マンガやアニメは、『絵に言葉を添えて語る』という日本の伝統」に基づいたものだから...

【補充指導】(判断基準Bのウを満たしていない場合)
 ...メジャーという野球マンガを観ていました。とてもおもしろくて夢中になって観ていました。
 助言 「筆者の主張を踏まえた理由付けを考えよう。」
 ...絵が語りかけてくる表現から多くのことを学びました。主人公が夢に向かって努力している姿から勇気もらい、頑張ろうという気持ちになりました。だから、筆者の考え方に共感できます。

(4) 各学校の実践例

ア 小学校第3学年「本は友達」(「話す・聞く」「読む」)

(ア) 単元及び本時の概要

紹介したい本を選んで説明し、その説明を聞いて感想を述べたり、質問をしたりする「読書発表会」を、単元を貫く言語活動として位置付け、話す・聞く能力及び読む能力の育成を図ろうとした単元である。本時は、読書発表会の前半である。

(イ) 単元の評価規準(第6時)

話す・聞く能力
本の面白さを伝えるために理由や事例を挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉遣いで話している。話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり、感想を述べたりしている。

(ウ) 「判断基準」

評価時期及び評価の対象	
8時間構成の第6時(話す・聞く能力) 読書発表会における発表と評価カード	
判断の要素	
ア 読書紹介の要素(題名・作者名・理由)	ウ 話し方・聞き方の態度
イ 効果的な紹介の工夫(引用・要約・音読・クイズなど)	エ 聞き手としての感想や質問
尺度	判断基準
B	ア・イ 自分で選んだ本について本の紹介をするという目的や必要に応じて文章を読み、好きな場面の会話を引用したり要約したりして発表原稿を準備し、発表している。 ウ 相手に分かりやすく伝えようとする話し方、積極的で受容的な聞き方の態度が表れている。 エ 話の中心を把握するために、質問をしたり聞き取って感想を述べたりしている。
	【予想される児童の表現例】 ア・イ わたしは「エルマーのぼうけん」という本を紹介します。作者はルース・スタイルス・ガネットという人です。この地図を見てください。これは、エルマーが...(中略) どうやって、エルマーが竜を助けたのかは、読んでからのお楽しみです。 どうですか。この地図を見ただけでもわくわくしませんか。ぜひ、読んでみてください。 ウ 地図を見ながら読むと、わくわくする冒険のお話だということがよく分かりました。ちょっとこわい動物が出てくるのに、さんはこわいとは思わなかったのですか。 エ ぼくは、冒険ものの本が好きですが、まだこの本は読んでいませんでした。さんがいちばんわくわくしたエルマーのぼうけんは何ですか。教えてください。
A	(判断基準Bに加えて) ア・イ 友達を読みたくなるような本の紹介をするという目的や必要に応じて文章などを引用したり要約したりして発表原稿を準備し、相手意識をもった発表ができています。 ウ 相手に分かりやすく伝えようとする話し方の工夫、積極的で受容的な聞き方の態度が発表に表れている。 エ 話の中心は何かを聞き取り、話し手の発表方法の工夫についても感想を述べたり、話の中心に応じた質問をしたりしている。

(エ) 本時の実際(6/8)

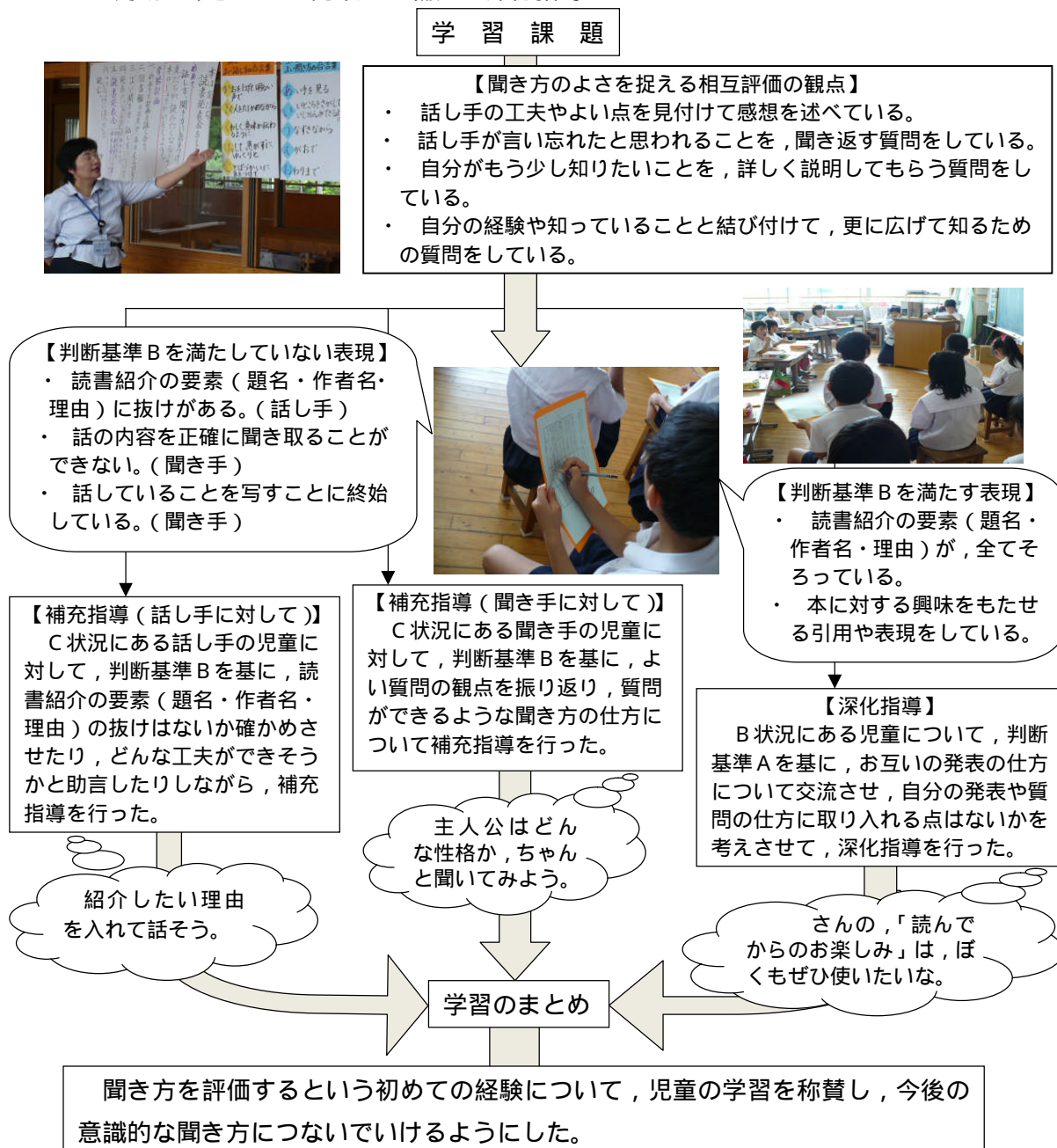
過程	学習活動	「思考・判断・表現」の評価
導入	【学習課題】話し方や聞き方に気を付けて、読書発表会をしよう。 ・ 学習の方法と順序を確かめて、読書発表会を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 友達のよい話し方と聞き方を探すという目的意識をもって、加点的な相互評価をさせる。【記述の分析】(判断基準Bのア,イ,ウ) 質問の仕方について、実際に教師がモデルを示し、話の中心を聞き取るための質問はどうかあればよいかを考えさせた。【行動の観察】(判断基準Bのエ)
展開	【読書発表会】 「話すこと、聞くこと」を意識して相互評価もできるようにするために、「話し手」、「聞き手」、「発表会を評価する聴衆」に、役割を分担して行う。 ▽ ・ 評価カードで、自他の話し方や聞き方を振り返る。	
終末	【学習のまとめ】 紹介したい本のことよく分かるような話し方の工夫ができていた。 よい聞き手として、感想を述べたり質問をしたりできた。 さんの紹介した本をぜひ読んでみたいと思った。 次の時間に発表をするので、今日の発表会の反省を取り入れたい。	

(オ) 考察

「判断基準」による指導

「読書発表会」を、単元を貫く言語活動として位置付け、自分の選んだ本の面白さを友達と紹介し合うという目的意識、相手意識を明確にした単元を構成した。このことにより、聞き手の関心を高めるような紹介の工夫や、話し手の紹介したい内容をよりよく知るための質問など、話す能力、聞く能力の双方を育成するための判断基準が明確になり、効果的、効率的な評価と的確な指導が可能となった。

「判断基準」による見取りと補充・深化指導



(カ) 成果と課題

補充指導・深化指導の具体化を図って実践したことにより、指導前に想定していた児童の姿（言語表現）と実際との差異を明らかにでき、単元を貫く言語活動を位置付けて課題解決に向かわせるための、より効果的な指導と評価の一体化の方策を確認できた。

より効率的な評価に向けて、基本的に一単元の一つの判断基準を設定しているが、該当単元で付けたい力を確実に付けることができるか、更に検証を行う必要がある。

イ 中学校第1学年「鑑賞文を書こう」（「書く」）

(ア) 単元及び本時の概要

郷土出身画家の作品の中から一つを選び、鑑賞文を書くという活動を通して、構成や記述の工夫、グループによる推敲や発表会による交流を行う。課題設定や取材、構成、記述、推敲、交流の各段階のねらいに即して「書くこと」の力を育むのがねらいである。本時では、作成した鑑賞文を読み合い交流するという活動の2回目であり、1回目の交流よりも更に具体的な指摘により、自分の表現を高めるための改善点等を明らかにした。

(イ) 単元の評価規準（第5・6時）

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
書いた鑑賞文を互いに読み合い、交流することで、自分の表現をよりよいものに高めようとしている。	書いた文章を互いに読み合い、相互評価を行うことで、自分の表現をよりよいものに高めるとともに、自分の見方や考え方を深めて鑑賞文を書いている。	作品のよさを表す語句を集め、文脈に応じて使い分けている。 作品のよさを書き表すために、比喩や反復などの表現の技法を必要に応じて適切に用いている。

(ウ) 「判断基準」

評価時期及び評価の対象	
6時間構成の第5時	交流カード（ワークシート）
判断の要素	
ア 書く材料（作品の分析）	イ 構成 ウ 表現の工夫 エ 見方や考え方の深まり
尺度	判断基準
	<p>ア 作品を見ていない人にも、作品のイメージが伝わるように表現を工夫して書いている。</p> <p>イ 作品の全体像、絵を見て自分が感じたこととその理由、作者や作品ができた時代背景、強く感じたことや想像できることの四段落構成で書いている。</p> <p>ウ 作品について自分が感じたよさが読み手に伝わるように、表現技法等を使って工夫して書いている。</p> <p>エ 交流したことを生かして、より深まった表現の鑑賞文を書いている。</p> <p>【予想される生徒の表現例】</p> <p>全体的に淡い色で統一されているが、桜島からもくもくと煙が立ち上っている姿が見てとれる。煙は、空高くまで立ち上っており、大爆発が起こったように見える。</p> <p>この絵を見て、桜島の力強さを感じることができた。なぜなら、画面いっぱいに桜島が描かれている構図であり、雄大な桜島の様子が伝わってくるからだ。</p> <p>この作品の作者は、黒田清輝である。大正三年に、桜島は大噴火を起こし、錦江湾に浮かんでいた島は大量の溶岩で大隅半島と陸続きになる。このとき、たまたま鹿児島に帰っていた清輝は、この大爆発を目の当たりにする。刻々と変化する桜島の様子を六枚の板に描いたものと言われる。</p> <p>清輝は、桜島の大爆発が目の前に迫り、切羽詰まった様子で筆をとったのではないだろうかと考えた。自然の驚異を感じさせ、見る人にも迫力を感じさせる作品である。</p>
A	<p>（判断基準Bに加えて）</p> <p>作品の全体像、絵を見て自分が感じたこととその理由、作者や作品ができた時代背景、強く感じたことや想像できることの四点が関連付けられて記述されている。</p>

(エ) 本時の実際（5/6） 展開部分のみ

学習活動	「思考・判断・表現」の評価
<p>3 作成した鑑賞文を学級全体で交流する。</p> <p>(1) 作成した鑑賞文 を発表する。</p> <p>(2) 発表を聞く生徒は、交流カードに評価を記入する。</p> <p>(3) 発表後に、交流カードを渡して特によかった点や改善点について話し合う。</p> <p>4 交流カードを参考にして、自分の鑑賞文の改善点を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 書くべき内容を整理する。 交流を通して、集めた情報の中から、何を取り上げ、どのように書くかを考え、判断する。 <p>5 改善点を発表する。</p>	<p>「内容・表現」「構成・表記」の観点で交流カードによる相互評価を行う。</p> <p>【記述の分析】(判断基準Bのア・イ・ウ)</p> <p>「特によかったところ」「清書に向けての改善点」を記入する。 【記述の確認】</p> <p>交流したことを生かして、自分の鑑賞文のどこを改善すればいいか、交流カードを参考に推敲する。 【記述の分析】(判断基準Bのエ)</p> <p>次時の清書に向けて、どのような点を改善するか、具体的に発表する。 【行動の観察】</p>

(オ) 考察

「判断基準」による指導

本時では、書いた文章を互いに読み合い、内容や表現について相互評価を行う活動を2回繰り返すことで、自分の表現をよりよいものに高めさせるとともに、自分の見方や考え方を深めさせようとしたものである。

その際、「判断基準」である「作品のイメージが伝わるような表現の工夫」「指定した四段落構成」「表現技法等の工夫」「交流を通して改善された表現」の四点で「思考・判断・表現」の見取りを行うと同時に、設定した「判断基準」を評価の観点としたワークシートを使用し、生徒に相互評価をさせることで、具体的な指導の手立てとしても役立てた。

題名「悲しそうな女性」

赤い花がさいている木があり、画面を向いた女性が立っている。着物と花の赤が、透き通るように白く美しい女性の肌を、そう引き立てている。

後ろの花や木をあわい色で描いて、女性が目立つようにした構図。だから、女性の表は、自分からやさしい。口を隠して、視線は少し下を向いていて、少し悲しそうな表情。子供など大切なものを見守っている様子が出て、心がうばわれた。

この絵を描いたのは、黒田清輝という方が描いた。一八六六年八月九日に鹿児島市で生まれ、一八九三年にフランスから帰国し、外の太陽の光を表現した作品を発表すること、日本に大きな影響を与えた。

この絵を、明るい色を使い、あわいところもあり太陽の光を表現している。それに明るい色を使って描いたのは、ま、こ、けい、な、女性、が、明、る、く、な、こ、ほ、し、い、こ、う、描、いた、の、は、な、い、か、と、考、え、る、。

判断基準Bのイ
清書に向け次の表現や表記を直した方がよいと思います。

判断基準Bのウ
表現技法を用いているか

判断基準Bのイ
四段落構成で書いているか

判断基準Bのウ
作品のイメージが伝わるように書いているか

「判断基準」による見取りと補充・深化指導

生徒自身の記述と「判断基準」による評価（相互評価の観点）が1枚になったワークシート（交流カード）を使用したことで、自分の文章の良いところや改善点が明確になり、補充指導や深化指導へつなげやすくなった。当初よりB状況にあった生徒作品の一部を次に示す。2回の交流会による相互評価を参考にしながら、教師がA状況にある生徒の作品の紹介や判断基準Aの内容に関する問い掛けを行いながら、より質の高い表現に練り上げていった過程が読み取れる。

交流会 1

探元は、三十一歳から富士山を描き続けていた。ここまで富士山を思う気持ちがあるのだ。この絵は、富士山の迫力、静かさなど本当の富士山のことをいろいろな人に知ってもらいたいと思い描いたのかもしれない。

交流会 2

このように探元は、三十一歳から富士山に心を奪われ四十四年以上描き続けた。この絵は完全に出来上がり富士山を知らない多くの人に迫力、堂々さ、静かさなどを知ってもらいたかったのだと思う。

清書

探元は、四十四年以上富士山を描き続けた。そして、この絵は富士山を知らない多くの人に迫力、堂々とした姿、静けさなどの富士山の魅力を伝えたのである。

(カ) 成果と課題

「判断基準」を生徒の言葉で設定したことで、身に付けさせるべき言語能力の重点化や適切な言語活動の選択、またそれを活用する時期等が明確になり指導計画が立てやすくなった。

「判断基準」を相互評価の観点として取り入れ、ワークシートを工夫することで、生徒は記述の内容や方法が明確になり、教師は補充指導・深化指導の手立てを講じやすくなった。

深化指導について、継続的な指導へつなげていく際、単元間の指導事項の調整や指導時間の確保について検討が必要である。

ウ 高等学校第2学年「現代の詩」(「読む」)

(ア) 単元及び本時の概要

第1・2時は、2編の詩を読んで初発の感想を書き、内容を理解する。第3時は、2編から選んだ詩と他の詩と比べ読みして共通する点と異なる点を考える。第4時(本時)は、比べ読みを通して書いた批評文をグループで交流する。第5時には補充指導と深化指導を行う。

(イ) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
他者との交流を通して、ものの見方、考え方を広げようとしている。	詩の表現から、作者の意図を捉えている。比べ読みを通して、詩を味わい、自分なりに評価している。	詩の言葉の働きを理解する。

(ウ) 「判断基準」

評価時期及び評価の対象	
5時間構成の第4時における終末時(読む能力)	生徒が選択した詩についての批評文
判断の要素	
ア 詩の内容	イ 比べるポイント
ウ 根拠に基づいた詩に対する自分の評価	
尺度	判断基準
	<p>ア 教科書の詩と比べ読みする詩の内容を把握している。</p> <p>イ 教科書の詩と比べ読みする詩の共通する点と異なる点を挙げている。</p> <p>ウ 教科書の詩に対する自分の考えを、根拠を示して述べている。</p> <p>-----</p> <p>【予想される生徒の表現例】</p> <p>教科書の「飛込」と、比べ読みをした「飛込」は、作者の詩のタイトル、水に飛び込むというテーマを扱っている点が共通している。</p> <p>しかし、教科書の「飛込」は「僕」が実際に飛び込んでいるのに対して、比べ読みをした方の「飛込」は、「あなた」が飛び込む姿を眺める視点で描かれている。また、教科書の「飛込」で飛び込んでいる姿には力強いイメージを感じるが、比べ読みの方の「飛込」では「衣装」「蜂」という言葉から美しくしなやかなイメージが強い。</p> <p>二つの作品を比べると、教科書の「飛込」の方がよりダイナミックで躍動感があると言える。</p>
A	<p>(判断基準Bに加えて)</p> <p>詩について多角的に評価している。</p> <p>人生や生き方などについて自分自身の考えを述べている。</p> <p>その他、詩を深く読んでおり、B状況以上と認められるもの。</p>

(エ) 本時の実際(4/5)

過程	学習活動	「思考・判断・表現」の評価
導入	<p>1 前時の内容を振り返る。</p> <p>2 本時の学習目標を設定する。</p> <p>詩を比べることを通して、教科書の詩の魅力や特徴を明らかにしよう。</p>	<p>前時の学習プリント(内容理解のためのワークシート)で、教科書の詩と比べ読みをする詩の内容を確認する。【記述の確認】(判断基準Bのア)</p>
展開1	<p>3 二つの詩を比較する。</p> <p>比較用ワークシート項目</p> <p>二つの詩の共通する点</p> <p>二つの詩の異なる点</p> <p>(表現方法・内容・気付いた点・印象など)</p>	<p>比較用ワークシートを用いて二つの詩を比べて分かったことをまとめる。【記述の確認】(判断基準Bのイ・ウ)</p>
展開2	<p>4 批評文を書く。</p> <p>5 グループでお互いの批評文を見せ合い、ものの見方・考え方を広げる。</p> <p>相互評価のポイント</p> <p>自分の意見と()が[同じだった/違った]</p> <p>書いてある意見は()が[分かりやすかった/分かりにくかった]</p> <p>文章を読んで、新たな発見が[あった/なかった]</p>	<p>グループ内で、よかった点、自分の意見と同じ点、異なる点等を付箋紙に書いて、批評文の横に貼る。</p> <p>【行動の観察】</p> <p>相互評価を通して自分の批評文を推敲する。</p> <p>【記述の分析】(判断基準Bのア・イ・ウ)</p>
終末	<p>6 まとめの文章を書く。</p> <p>7 次時の学習では、指導者から示された他の生徒の批評文を参考にして、自分の批評文を完成させること(補充・深化指導を行うこと)を確認する。</p>	<p>詩の学習を通して自分の考えを深めることができたかということについて初発の感想を用いて比較する。</p> <p>学習を通じた感想を書く。</p>

(オ) 考察

「判断基準」による指導

本時（第4時）では判断基準Bにア・イ・ウの三つを設定して指導することとした。判断基準Bのアは前時（第3時）において学習した内容であり、本時の導入の段階で確認した。判断基準Bのイ・ウは本時の展開1の段階でワークシートを用いて指導した。生徒たちには、その判断基準Bのア・イ・ウを踏まえた批評文を、展開2の段階で記述させた。

「判断基準」による見取りと補充・深化指導

生徒たちには、三段落構成で、第一段落に共通点、第二段落に相違点、第三段落に自分の考えを記述させた。次は、B状況にあると判断した生徒の批評文の例である。教科書の詩を「 の詩」、比べ読みをした詩を「 の詩」として表記した。

【B状況の批評文】
の詩と の詩は、うまくいっていない現実を描いているという点で共通している。
の詩と の詩の異なる点としては、まず、詩の背景が挙げられる。 の詩は「夕ぐれ」と書いてあるのに対して、 の詩では「朝」と書かれている。次に、 の詩は主人公が何かに縛られているような感じがするが、 の詩では、特にそんなことは書かれていないし、感じられない。 は迷いがあるように思えたが、 は前向きに進もうと思えた。
以上のことから、 の詩は、前に進みたいけど、なかなか決意が決まらないことを描いていると言える。

判断基準Bのアにより、文章全体にわたって、二つの詩の内容を把握しているかを確認する。判断基準Bのイ・ウにより、共通点が第一段落に、相違点が第二段落に、自分の考えが第三段落に、それぞれ述べられているかを見取る。この生徒の作品は、判断基準Bのア・イ・ウを全て踏まえているので、おおむね満足できる状況であると判断できた。

第4時終了時点で評価した結果、A状況が16%、B状況が29%、C状況が55%。C状況は全て未完成の文章であった。

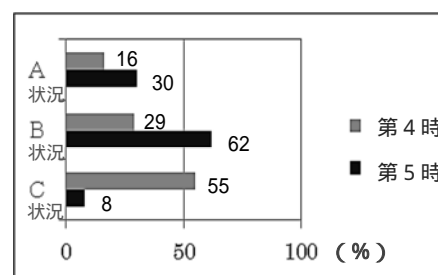


図16 批評文の評価

第5時は、補充指導の手立てとして、A状況の生徒の文章4作品を配布して自分の文章を完成させる参考とした。深化指導としては、「この点についてはどのように考えるか。」というように助言して新たな視点を示して考えさせた。その結果、A状況が30%、B状況が62%、C状況が8%となった（図16）。

次は、C状況の生徒が、補充指導や深化指導を通して、A状況と判断できる内容に書き改めた批評文の例である。主に変更した部分を太字で示した。

【A状況の批評文】
の詩と の詩は、自由を求めているという点で共通している。
の詩と の詩の異なる点としては、まず、 の詩は「ただ あのベルがなりやんだら 」から、いつ発とうか迷っていることが分かるのに対して、 の詩は「巢のひばりがとび立とうとしている」から、もうすぐとび立とうとしていることが分かる。次に、 の詩は「もうながいこと」から、わたしがいつ出発しようか長い間迷っているのに比べ、 の詩は、「ある朝」から、ふと思ったことで迷っている心情はあまりないという印象を受ける。また、 の詩は、今いる場所と行きたい場所がはっきりしていることが読みとれるが、 の詩は、今いる場所も行きたい場所も読みとることができず伝わりにくいことが分かる。
以上のことから、 の詩は、行きたい場所は決まっているけれど、「まといつく風景」を捨てきれず、出発できずに迷っているということが言える。 の詩は、行きたい場所ははっきりと決まっていなから、とび立とうとしていることが言える。そして、 ほどの迷いはないが、「日はいつも曇っているの」から、不安な気持ちということも言える。

第二段落に述べている相違点については、詩の中の言葉を引用することを指導したことにより、読み手が分かりやすいように書き改めることができた。また、第三段落については、前時（第4時）までに書くことができなかったが、「行きたい場所」と「迷い」を関連付けるといった視点を示して指導することにより、読み深めて書き加えることができた。

(カ) 成果と課題

評価の観点を焦点化し、「判断基準」を明確にしてそれを生徒に示すことで、読み比べたことを基に何をどう書けばよいのかイメージさせて、目的意識をもたせることができた。

補充指導後もC状況だった生徒に対する手立てについては、読み比べてイメージした状況にふさわしい心情を表す言葉を手掛かりにして考えさせるなど、工夫する必要がある。